

思想空間としての「八〇年代」——「新啓蒙」思潮の諸相と現代中国

博士学位申請論文要旨

譚仁岸

本論の目標は、政治的・経済的・精神的な意味で現代中国に影響を及ぼし続けているにも関わらず、学問的な決算が本格的に始まってまだ間もない一九八〇年代（以下「八〇年代」）の具体的な歴史像と思想史的位置づけを究明することにある。

八〇年代の歴史的位置づけに関しては、従来既に「新時期」と「文革後」という二つの呼称が付与されていた。それは八〇年代に絡んでいる二面性をよく表せる言葉であり、前者は文革を古いものとして忘却させようとするのに対して、後者は結果的に文革の記憶を喚起する効果を持っている。

「新時期」は概ね文学史概念として使われているが、その由来は、政府が過ぎたばかりの文革を「一時的な挫折・誤り」と解釈し、一九七六年以後の歴史を「古い」文革と異なる「新時期」として強調する一連の文書によるとされている。同時に、八〇年代の多くの啓蒙的批評家たちが「新時期」の未来を展望する際に、五四時代のリアリズム、モダニズムなどの文学伝統が、必ずと言っていいほど比較対象として持ち出されてくる。また、文学だけでなく、八〇年代の全ての人文的言説は否応なく、五四新文化運動と文化大革命という二つの「文化」運動に根ざして育てられていたものであるといっても過言ではない。

従って、八〇年代は、主として文革からの脱出と五四新文化運動の継承という二つの巨大な歴史的使命を背負っていると理解される。というのは、八〇年代を探究することは、ある意味では文革と五四運動によって刻印されていた価値や信念を探求することになる。このような意味では、八〇年代の「新啓蒙」思潮という言い方が始めて有効となるのである。

しかも、これらの価値や信念が八〇年代の特殊な政治的・社会的・文化的状況と不可分に結合していたために、そのような状況を、捨象して考察するわけにはいかない。言い換えれば、文革と五四運動が提起した諸問題は、八〇年代を通じて特殊な形で繰り返され、変化され、反芻され、再解釈され、再構成され、現在の我々の思考を制限しているが故に、もし現代中国の政治的・社会的・文化的状況、現代中国知識人の精神史、または現代中国の人文一般を、歴史という参照物を介在して理解しようとするれば、八〇年代の歴史を簡単に飛ばして「文革」、「五四」、或いは「清末」などに直結していくことができなくなっているといえよう。ここにこそ、八〇年代の史的状況をなるべく可視化していく必要がある。

他方で、九〇年代以降の中国現代思想の変動に与えた八〇年代の影響も見逃してはならない。

政治学者の蕭功秦は、現代中国に併存している諸思潮を、「自由主義思潮」、「新権威主義思潮」、「新左派思潮」、「新民族主義思潮」、「文化保守主義思潮」、「民主社会主義思潮」に分けて論じている。それらは、九〇年代以降台頭してきた「新左派思潮」、「新民族主義思潮」の「新しさ」を除けば、基本的には八〇年代において既に影響力を発揮した社会思潮である。歴史学者李零がいったように、「八〇年代に花は咲き、九〇年代に実を結んだ。」九〇年代以降有力となったほかの諸思潮も、実は八〇年代にその根元が見出され得るのである。

それが故に、八〇年代の歴史的状況を再現する際に、九〇年代の現代中国思想との相互的な観照も大事だと筆者は考える。

八〇年代は、最初から様々な思潮の力関係がそこに混在している故に、常に今日の保守的または改革的なイデオロギーの需要から召喚されてくるという論争的な運命に晒されている。歴史学者の王学典も述べたように、「五四」と同様、「八〇年代」は、既に一つの思想史の記号と化しているのである。

王学典は、許紀霖による「理論界」、「学术界」、「公共的思想界」という知識圏域の分類に従って、思想史としての「八〇年代」を次のように三つの段階に分けている。①一九七六年から一九八三年の「反精神汚染」キャンペーンまでの前期。それは党内の理論家たちが主役である「理論界」の活躍以外に、所謂「思想文化界」がまだ形成されていなかった時期である。②一九八四年から一九八六年末までの中期。伝統文化を批判し、再審する文化討論（「文化熱」）が顕在化し、相対的に独立した「思想文化界」は基本的な形をなしたが、「理論界」も大きな主導的作用を持っていた。③一九八七年の春から一九八九年夏にかけての後期。この段階において、「反伝統」、「全面的西洋化」といった主流思潮のほか、異なる政治視点のせめぎ合いが改めて浮上し、天安門事件の醸成にも繋がっていった。

本論も基本的にはこうした時期区分に従って展開するものであるが、冒頭でも記したように、五四・文革・現代中国との連鎖における八〇年代の思想文化、価値や信念などの精神史的な変遷に本論の着眼点がある故に、既存の八〇年代の文化地図を修正・補完しながら、次のように五つの主題に分けて八〇年代「新啓蒙」思潮の全貌にできるだけ迫っていった。

第一章では、八〇年代前期に発生した党内理論家たちの既成体制とのイデオロギー闘争を跡づけることによって、脱文革した政権の内部分岐を示し、東欧社会主義国家でも起きた所謂「人間の顔をしたマルクス主義」の人道主義・疎外概念をめぐる論争の内的論理を確認し、胡喬木のマルクス主義疎外超克論と王若水の疎外遍在論との相克について分析した。そして、二〇〇〇年代に出てきた賀桂梅の八〇年代研究の関係論点、及び中国現代思想の旗手的知識人である汪暉の八〇年代論「当代中国的思想状况与現代性問題」における「新啓蒙」知識人と国家の関係問題に対して、異議を提示した。こうした作業を通して、八〇年代前期の党内理論家たちが如何に主流のイデオロギー空間（理論界）に異質性を取り入れ、外部の学术界とのインタラクションを通して公共的思想界の形成に貢献したか、

そして政治史的史実の欠乏が九〇年代以降、如何なる混乱を招いたかを検証してみた。

第二章では、清末以降のもう一つの翻訳の黄金時代として見なされている八〇年代の出版・読書事情に焦点を当てて、八〇年代の出版史・閲読史（読書史）という経路から、「新啓蒙」思潮の生起、とりわけ文化討論の活発化に貢献した知識人の翻訳・出版活動に着目して考察を行った。書籍は精神史、文化史の物質的媒介である故に、出版史・閲読史への接近によって、八〇年代の精神史、文化史における諸モチーフ（訳者・作者・読者の関心内容）が垣間見えてくるのではないかと考えられる。それに関しては、文学作品の視角からの検討は恐らく多くなされていたのに対して、文学史以外のメディア論や知識人論に注目するアプローチはまだ少ないし、特に社会的な知、集団意識としての知（エピステーメーかパラダイム）について追究する場合、より多くの社会科学書や歴史書を考察した方が有効的だと思われるために、本章は文学作品より、後者に重点を置きながら考察を試みた。

その中に、まず八〇年代前期の「読書には禁区なし」という李洪林の文章をめぐる波紋を紹介し、文革期から八〇年代前期までの「書荒（書物の荒廃）」状態を描写した。そして八〇年代中期から、文献的・思想的な資源を組織的に提供しただけでなく、また研究者、思想家、或いは社会活動家としても大きな影響力を発揮していた五つの知識人グループ——「中国文化書院」編集委員会、「走向未来」叢書編集委員会、「文化：中国与世界」叢書編集委員会、「新啓蒙」派、「二十世紀」文庫編集委員会の仕事を整理分類し、彼らの編集した叢書の代表的なものを取り上げた。最後に、他の著名な叢書、雑誌、単行本についても検討してゆき、八〇年代の読書事情を詳しく追究してみた。

第三章では、八〇年代中期から起きた、一般的に「文化熱（文化ブーム）」と呼ばれている文化討論の潮流の在り方をなるべく十全に考察した。文化討論の展開過程、論題の編成、及び伝統文化に関する諸説——「儒学復興」説、「徹底再建」説、「西体中用」説、「精華糟粕」説——を取り上げて分析し、特に反伝統派と目される「徹底再建」説の代表的人物の主張を検討した。そして、主流の階級言説に取って代わろうとする活発な文化言説は、ほぼ同時期に起きた「尋根」文学という文学潮流と、思想的には如何に呼応していたかを考察した。同じく「文化」を唱える「尋根」文学思潮の主張や性格を、文化討論から見ればどうなるか、そして文化討論の主張を「尋根」文学思潮のほうから見れば、何が見えてくるのかを検証した。両者における「文化」の意味するところの異同に焦点を当てて、八〇年代知識人の間に共通した文化意識と価値的志向を多角的に浮き彫りにした。

第四章は、二〇〇〇年代に入った中国において、儒教・儒学が近代的憲政主義とともに議論されるようになった動きは、八〇年代の文化討論における儒学言説と如何なる思想的な関連を持っているのか、そして、伝統文化の代表格と見なされた儒学が如何なる方式で近代化問題と立ち向かうのかを検証するものである。主として新儒家の一人杜維明の反伝統主義批判、余英時と林毓生の儒学と近代の融合を図る「創造的転化」論、李沢厚の近代化志向の「西体中用」説に基づく「転換的創造」説、甘陽の近代性批判による文化的保守主義としての儒学論を取り上げて、詳細に論評した。

第五章では主に次のような課題を処理したのである。九〇年代以降に現実化された市場経済主義が創った物質的豊かさの代わりに、高度経済成長期において噴出してきた様々な「近代病」——貧富格差や官僚腐敗をはじめとする金融危機、環境汚染、社会の動乱、失業者の激増、共同体の瓦解、個人の均一化、人文精神の凋落、拝金主義の蔓延、道徳観の退廃、道具的理性の膨張などの政治的・経済的・社会的・文化的な問題や矛盾——に対して出された病因診断と処方箋は、現代中国の知識界の分裂を招き、そして八〇年代の「新啓蒙」思潮への評価の差異をも生み出した。だが、果たして汪暉が批判したように、八〇年代の「新啓蒙」思潮が「反近代」的要素を社会主義から排除し、「新自由主義」を招来したが故に、中国は以上のような「近代病」に罹るようになったのか。もしその思想的な責任を「新啓蒙」思潮が負わなければならないとすれば、それが如何なるもので、如何にして形成してきたのかを、八〇年代以来の近代化論から近代性批判への変遷、「封建主義」批判と近代性批判の異同を考察し、汪暉が提起した「新啓蒙」思潮批判への応答を試みた。

最後に、終章では以上の五つの主題の議論の到着点を受けて、八〇年代の政治史・マルクス主義思想史（第一章）、出版史・読書史（第二章）、文化史・文学史（第三章）、儒学史（第四章）、近代化論・近代性批判（第五章）にわたる作業によって掘り出された幾つかの問題を通して、如何なる八〇年代像が浮き彫りにされてきたのかについて、総括してみた。結論からいえば、八〇年代の時代的課題を構成したのは、社会主義民主化の要求、精神的飢饉の解消、文化的アイデンティティの再建、近代に対する信頼と猶予の併存症的感情であった。八〇年代の「新啓蒙」思潮は、国民国家の専制的抑圧と言語支配に対しては始終有効的な抵抗力を見せてきたが、同時に八〇年代の未熟さも現していた、ということになる。